

初年次教育の組織的導入のはかりかた¹

小島佐恵子²・濱名 篤³・山田礼子⁴

北里大学・関西国際大学・同志社大学

1. はじめに

本ラウンドテーブルは、「組織的導入のはかりかた」というテーマではあったが、参加者の多くが「正課内（必修・単位付与型）で初年次教育を実施している教員」であったことから、すでに初年次教育を実践している者が、次のステップを踏み出す手立てを知ることに主眼が置かれた。2名の講師は理論的知識や米国等での豊富な調査研究の蓄積のみならず、自身の大学で初年次教育の組織的導入・推進を精力的に実施してきた先駆者である。ラウンドテーブルは、これまでの研究から得た知見を基に、参加者が求める課題に合わせて議論する形で進められた。参加者は200名を超えていたが、初年次教育には欠かせないアイスブレイキングの実践も行われた。具体的な内容については、参加者の挙手によって「初年次教育のコンテンツ（内容）」、「初年次教育のための組織づくり」、「初年次教育の担当教員」、「初年次教育の効果測定」の4つに関心が集中していることが判明したため、これらをどのように考える／行うかという議論が行われた。

2. どのように初年次教育のコンテンツを考えたらよいか

中央教育審議会の審議経過報告「学士課程教育の再構築について」にあるように、現在の初年次教育で重視されている内容は、「レポートや論文などの文章技法」「コンピュータを用いた情報処理や通信の基礎技術」「プレゼンテーションやディスカッションなどの口頭発表の方法」「学問や大学教育全般に対する動機づけ」「論理的思考や問題発見・解決能力の向上」「図書館の利用・文献検索の方法」等である。しかし、これらのどれが一番良いかということはなく、自分の大学のカリキュラムに合った内容を模索し、実施するのが望ましい。なぜなら、他大学で成功した内容をそのまま自大学に導入しても失敗することが多いからだ。模索の方法としては、周囲の教員とブレインストーミングを行い、自大学の特徴に合わせた内容を考えていくことが良い。たとえば、関西国際大学では、ノートテイキングやレポートの書き方について、学習支援センターへの問い合わせが多いことから、学習技術の習得に焦点を当てた研究会を結成し、そこでの成果が現在の初年次教育の原型となったという。

3. どのように組織作りをしたらよいか

組織づくりも同様に、他大学の例を自大学に当てはめてもうまくいかないことが多いため、「自大学で困っていることは何か」をまず具体的に知ることが重要である。さらに、自大学のカルチャーや特徴についてもよく知っておく必要がある。たとえば、同志社大学では、大規模大学であるという特性に合わせて、ボトムアップ（例：啓蒙活動）とトップダウン（例：学生調査）をバランス良く組み合わせて初年次教育を推進してきた。しかし、その中では少なからず犠牲（例：

¹ ラウンドテーブル報告者：小島佐恵子，ラウンドテーブル担当者：濱名 篤・山田礼子

² 北里大学一般教育部／高等教育開発センター saeko@kitasato-u.ac.jp

³ 関西国際大学学長 hamanaa@kuins.ac.jp

⁴ 同志社大学社会学部／教育開発支援センター ryamada@mail.doshisha.ac.jp

自らモデル授業を実践する)も払わなければならなかった点もあるという。実際の進め方としては、学部レベルか、少なくとも学科単位で始めることが基本である。これは教育目標の共有や達成のために必要な条件である。また、FDでは、教員同士が十分な議論ができる時間や場所、環境を確保することが必須である。すなわち、組織的に進めていくためには、FDも含め、自大学における進行プロセスをいかに大切にできるかが鍵なのである。

4. どのように初年次教育の担当教員を確保したらよいか

初年次教育へのかかわり方としては、コーディネータとして、あるいは実際の担当者として等、さまざまな方法がある。教職員に何を担当してもらうかは、その大学(学部・学科)の意思決定によるが、やはりある程度本人の意志の有無が鍵となる。立ち上げの際は、コーディネータは大変だが、教育目標や教材が確定している場合、その他の担当者の負担はそれほど多くない。むしろ、冒頭で「初年次教育を導入して良かった点」として参加者が述べたとおり、学生同士や学生教員間の交流が深まる、授業満足度が上がるという手応えがあると、教員は自発的に取り組むようになるのである。担当者確保のためには、早くこの実感を掴んでもらうことが重要である。

5. どのように初年次教育の効果測定をしたらよいか

まず、「目標を明確に」し、「何ができるようになったか」について、学生自身が答えられる指標を用いることが重要である。初年次教育の目指す文章力、表現力、読解力、分析力、思考力などを身につけさせるためには、アクティブ・ラーニングを活用するなど、ペダゴジー(教育方法)の工夫によって、より効果を高めることができるだろう。初年次教育では、さまざまなスキルを身につけることが期待されているが、効果を測定するためには十分に評価の焦点を絞らなければならない。初年次教育に限ったことではないが、常に「教育目標に照らして」評価を行うことが重要である。その際、必ず証拠(エビデンス)表記が必要である。たとえば、授業満足度が高かった、だけでなく、具体的に「どのような学生の気づきがあって」満足度が高かったのかが書かれていなければ、不十分なのである。つまり、教育目標の設定と多面的な評価尺度の設計を十分に検討した上で授業に取りかかることが効果測定のポイントといえよう。さらに、米国で初年次教育の評価研究を長年行ってきたスウィング氏の指摘にもあるとおり、プログラム全体の評価には、学生が同時に履修している科目との相互作用も含まなければならない。もし初年次教育において期待以上の成果が上がらなかった場合は、他の科目との関係も含めて全体を見直すことが大事である。このように科目間の相互作用にも目配りができているかということも効果測定のポイントになるだろう。さらにより長期的な視点に立てば、効果測定には上級年次への接続も考慮する必要がある。なぜなら、学士課程教育に初年次教育を適切に位置付けるのであれば、当該大学の学士課程教育の完成にいかに関与しているかわかることが本来の成果となるからだ。たとえば、継続的な学生調査はその一つの手段だが、実際にはこのような調査で変化・成長が見られる学生は少数である。これらの達成には、いかに継続的支援を施していくかが重要なのである。

6. おわりに

多くの課題に対してどうしたらよいか、参加者それぞれが自大学の問題に向き合ったラウンドテーブルであった。最後には、参加者は導入段階を越えてもう一歩先の「組織的にどう発展させるか」についてのイメージを頭の中で膨らませたのではないだろうか。しかしこれを考えるにはいささか時間が短すぎた。今回のラウンドテーブルが真価を発揮するのは、参加者自身がここで得たものを自大学で自ら実践するときである。今後、是非その後の健闘についても語りたい。